

九州支部

良である。

腺癌の示すX線像は、このような表層進展と深達進展の組合せとして分析でき、進展の様相と時期を把握することによって、臨床的あるいは基礎的な検討に対する back ground の1つとなり得ると考えられる。

1. 肺癌の住民検診について

熊本大学第一内科

田宮二郎, 志摩 清, 福田安嗣

杉本峯晴, 徳臣晴比古

結核予防会熊本県支部

千場文江, 末次恭平

昭和51年52年の2年間での熊本市住民検診に於ける肺癌発見例8例について臨床的検討を試みた。受診率は51年30.5%, 52年30.3%と低率であり、原発性肺癌と診断し得た症例は0.013%, 0.004%に相当した。組織学的には扁平上皮癌4例, 腺癌2例, 大細胞癌1例, 小細胞癌1例で、臨床病期はI, II期が6例であった。治療と予後については根治手術可能例でも予後不良であり、今後検討すべき点を残した。

2. 集団検診により発見された

肺癌の臨床的検討

鹿児島大 放

小山隆夫

篠原慎治, 伊東祐治

国療南九州放

瀬ノ口頼久

過去5年間に当科で肺癌と診断された症例中、集検にて発見された47例について異常陰影発見から肺癌確定に至るまでの推移を検討し、集検発見肺癌の実態とこれに伴う問題点について報告した。集検発見肺癌には早期例が多く含まれていたが(I期55%), 肺門部肺癌の発見は少なかった(17%)。集検発見肺癌には実地医家の段階で誤診され確定診までに長期間を要するものも少なくなく、また毎年集検受診者中23%に見落としが確認された。

3. 初診時、肺結核として治療されていた肺癌21例の臨床的検討

国立療養所南九州病院

川井田浩, 江川勝士, 入来敦久

福永秀智, 池畑正明, 乗松克政

21例は、女性12例, 男性9例で、このうち、集検発見例が11例含まれていた。肺結核合併例は、4例にすぎなかった。発見時の陰影の大きさの平均は3cm以下で、確定時の大きさの平均は3cm以上であった。原発巣の部位は結核の好発部位とはほぼ一致しており、同部発生肺癌の誤診頻度の高さがうかがわれた。鹿児島県における集団検診の今後のあり方についてふれ、現在の肺結核登録者の再検討の必要性を強調した。

4. 肺結核に合併した気管支上皮内癌の一例

九州大学第2外科

桑野博行, 吉田猛朗

原 信之, 井口 潔

九州大学第1病理 石田照佳

69才の男性で、胸部レントゲン写真上、左上肺野に腫瘤状陰影を認め、喀痰細胞診、並びに気管支鏡擦過細胞診にて、パパニコロー5型(扁平上皮癌)を認め、左上葉切除を行った。

術後の精査で、腫瘤状陰影は肺結核であり、気管支断端に、気管支上皮内癌を認めたので左下肺葉の追加切除を行った一症例を経験し、臨床病理学的検討を行ったので、報告する。

5. 特異な臨床像を呈した肺癌症例

宮崎医科大学第2内科

柴田紘一郎, 古賀保範

松本和久, 鬼塚敏男

追田耕一朗, 前田隆美

浜砂重仁, 和气典雄

一の瀬幸人, 富田正雄

教室でS52年11月以来、原発性肺癌20例を経験、それらの内①70才男性で胸写上縦隔腫瘍を疑した例②嚥下困難を主訴に来院、食道透視上Imに7.5cmの狭窄を呈し原発巣は左下葉枝を閉塞。末梢肺気腫性変化を呈し原発巣確認に難渋した例③原発巣は肺野型2.5cmの比較的小型でありながら左腋窩リンパ節転移が自覚症状であった例④妊娠に合併した癌性胸膜炎と特異な臨床像を呈した4症例につき臨床的観点より若干の検討を加えた。

6. 脳圧亢進症状で発見された原発性肺癌の1例

長崎大学第2内科 籠手田恒敏

今村由紀夫, 植田保子

原 耕平, 雨森博政, 奥野一裕

当科における原発性肺癌剖検例の脳転移率は、87例中17例、19.5%であった。更にこれら転移の占拠部位は、大脳が最も多く82.4%、次いで小脳、脳幹、硬膜であった。私達は、65才男性で頭痛、意識障害等の脳圧亢進症状で発症し、腫瘍の硬膜転移により硬膜下血腫を来し、減圧の目的で開頭術を行ったが、2.5ヶ月で死亡した類表皮癌の1例を経験したので報告した一剖検にても、腫瘍の頭蓋内転移は脳実質内には認めず、硬膜のみであった。

7. 原発性肺癌、特に腺癌の治療について

熊本大学医学部第一内科

千場 博, 高野卓二, 興梠博次

千場文江, 平岡武典, 重永孝治

杉本峯晴, 福田安嗣, 安藤正幸

志摩 清, 徳臣晴比古

腺癌の臨床病期別の予後は、I期及びII期とIII期及びIV期との間ではかなりの差が認められ、特にI期では全例に外科的切除術を行い良好な結果を得ている。